

メキシコの大学教師対象 『まるごと 日本のことばと文化』研修

—学習者体験を通して理解を深める研修デザイナー—

佐藤五郎・鵜飼香奈子・佐藤志穂

1. はじめに

本稿は、国際交流基金メキシコ日本文化センター（以下、JF メキシコ）が2020年7月から8月にかけてメキシコ国内のM大学の教師たちを対象に実施した『まるごと 日本のことばと文化』⁽¹⁾（以下、『まるごと』）の使い方に関するオンライン研修について報告するものである。本研修は、JF メキシコの日本語上級専門家と日本語専門家（以下、報告者ら）がデザインから準備、実施まで担当した。以下に、実施経緯、実施概要、『まるごと』に対する理解を深めるための方策について述べ、研修参加者たちが『まるごと』についてどのように理解したかを考察する。

2. 研修実施経緯

M大学は1943年に設立された私立総合大学で、北部地方にある本キャンパスの他、メキシコ全土に25のキャンパスを有する。日本語教育は1996年に本キャンパスの第2外国語（選択必修科目）に日本語が加えられた⁽²⁾のを皮切りに、その後4つのキャンパスの大学付属言語センター（以下、言語センター）で一般向け公開講座が始まった。

2019年度⁽³⁾にM大学全体でカリキュラム改変が行われ、第2外国語は単位認定科目から外され、履修希望者は言語センターの公開講座を受講することになった。この改変を受け、本キャンパスで日本語のカリキュラムを公開講座用に改訂すること、同カリキュラムは2020年度から使用されることが決定した。なお、M大学の外国語科目のカリキュラムは、全キャンパス共通のものを本キャンパスが作成することになっている。従って、日本語カリキュラムも本キャンパスが作成したものが他の4キャンパスで使用されることとなった。

2020年3月、カリキュラム作成担当の本キャンパス日本人教師から報告者らのもとにカリキュラム作成と主教材選びについて相談があり、主教材を『まるごと』に変更したいと言われた。その理由は、①海外在住成人を対象に制作されていること、②他言語のカリキュラムはCFERに基づいているが、これまで使用していた主教材はCFER準拠ではなく、JF日本語教育スタンダード準拠の『まるごと』を使用することでそれらと共通の尺度が持てること、③M大学

全体が将来的な e-learning 開始を見据えており『まるごと』はオンライン教材が充実している点で大学の方針に合致していることだった。ただ、同教師をはじめ他キャンパスの教師たちも『まるごと』使用経験がほとんどないため、JF メキシコに『まるごと』の使い方について研修を行って欲しいと依頼された。

そこで、M 大学の夏休み期間を利用し、7月下旬に本キャンパスにて1週間程度の集中研修を実施することとした。しかし、3月下旬以降メキシコ国内でも新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化し、報告者らは4月上旬に避難一時帰国することになった。そして、実施予定日が近づいても再赴任の目途が立たなかったため、オンラインでの実施へと変更することとした。

3. 研修概要

表1 研修概要

研修名	M 大学『まるごと』研修会
期間・時間	2020年7月20日（月）～8月1日（土）19時～21時（メキシコ中部時間） ※全10日間（7月24日、26日、31日を除く） ※7月25日のみ9時～11時、19時～21時の2回実施
回数	11回
目的	①『まるごと』の理念・教え方について理解を深める ② M 大学日本語教師たちの『まるごと』使用への不安解消
参加者	8人（日本人2人、メキシコ人6人）
講師	3人（JF メキシコ日本語上級専門家1人、日本語専門家2人）
使用ツール	Zoom（オンライン会議ツール）、Google Classroom（学習管理システム）

研修概要は表1の通りである。以下、期間と時間、参加者、内容とスケジュール、使用ツール等について説明する。

3.1 期間と時間

実施期間と1日あたりの時間については、本研修の依頼主である日本人教師と相談しながら決定した。メキシコと日本との時差やオンライン研修で持続可能な集中力等を考慮した結果、1日2時間で全11回、合計22時間に決定した。なお、当初対面型研修として計画していた際は研修の仕上げとして参加者に『まるごと』を使った模擬授業を行ってもらう予定だった。しかし、オンライン研修でそれを行うには参加者の IT スキルやインターネット状況等、課題や問題が多いため、実施は困難と判断し省略することとした。

3.2 参加者

参加者の属性を表2に示す。様々な教授歴の教師が参加したが、特に教授歴10年以上の教師が8人中6人を占め多数派であった。メキシコ人は全員日本語能力試験 N3または N2に合格して

いた。また教科書については研修当時、それぞれの機関で『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』⁽⁵⁾ 『みんなの日本語初級』の他、『まるごと』入門 (A1) も使用されていた。

表2 参加者属性

地方	所属	国籍		教授歴 (年)		
		メキシコ	日本	0-4	5-9	10-
北部	本キャンパス	2	2			4
	M 大付属 C 高校 ⁽⁴⁾	1		1		
首都圏	T キャンパス	1			1	
	C キャンパス	1				1
	P キャンパス	1				1
	合計	6	2	1	1	6

首都圏は首都メキシコシティ周辺の州を指す。

3.3 内容とスケジュール

時間・期間上の制約等があったため、JF メキシコが過去に行った『まるごと』研修を参考にしつつ講義内容を精選し、参加者たちが研修後すぐに『まるごと』で授業が実施できることを目指した。さらに、講義内容の理解を補強する方策として、講師が行う『まるごと』の授業を参加者が学習者として体験する時間も設けることとした。授業体験で使用する教科書は、「かつどう」と「りかい」両方の体験が必要であること、メキシコ人教師たちの日本語運用レベルと乖離しすぎていない方が現実の授業に近い体験ができることから、初級2 (A2) に決めた。扱うトピックは、参加者たちと講師との間に情報差があり生き生きとしたやりとりが生まれそうな「れきしと文化の町」(トピック7) を選んだ。教科書は各自で事前に購入してもらい、配送の都合等で研修までに手元に届かない参加者には特別に該当課の PDF を提供した。

表3 研修内容とスケジュール

回	内容
1	オリエンテーション 【講義1】『まるごと』概要① JF 日本語教育スタンダードと『まるごと』
2	【講義2】『まるごと』概要② 『まるごと』の特徴、第2言語習得理論との関係
3	<授業体験1>初級2 「かつどう」 Topic7 だい13か
4	<授業体験2>初級2 「りかい」 Topic7 だい13か
5	【講義3】「かつどう」の構成・教え方
6	【講義4】「りかい」の構成・教え方
7	<授業体験3>初級2 「かつどう」 Topic7 だい14か
8	<授業体験4>初級2 「りかい」 Topic7 だい14か
9	【講義5】評価の方法
10	【講義6】文化の教え方/ポートフォリオ
11	振り返り/まとめ

こうして全11回の内容を表3のように決定した。なお、研修の第1回から第8回に実施した、講義と授業体験を通して『まるごと』の理解を深める過程は、本研修の中核をなす部分であるため、次章で改めて詳述する。

3.4 使用ツール

オンライン研修を行うにあたり、使用ツールとしてオンライン会議ツールの Zoom と、学習管理システム (LMS) の Google Classroom を選んだ。

Zoom を選んだ理由は、参加者が使い慣れていること、その他のツール (Microsoft Teams、Google Meet 等) に比べ音声や画質が安定していること、グループワークを行うのに適した Breakout Rooms 機能が備わっていることである。なお、Zoom を安全に使用するため、会議室の ID とパスコードを毎回変更し研修開始30分前に Google Classroom を通じて参加者に通知するとともに、「待機室」機能で本人確認を行った上で入室を許可するようにした。

Google Classroom の使用を決めたのは、研修期間中、自己評価表をはじめとする様々な課題の配付・提出・返却を頻繁に行うことがわかっており、講師・参加者双方の作業をできるだけ簡素化したいと考えたためである。Google Classroom を使えばこれらを一括して行うことができるので便利であると判断した。

3.5 その他

学習の自己管理を推奨する『まるごと』のコンセプトに則り、本研修も参加者の自己評価を重視したいと考えた。そこで、各回の目標達成度を振り返るための自己評価表を、講義用と授業体験用の2種類作成した。講義用は『まるごと』の理念や教え方に関して17の Can-do リストを作成した (稿末資料1)。一方、授業体験用は『まるごと』初級2 (A2) の「かつどう」と「りかい」から、それぞれトピック7の「Can-do チェック」と「にほんごチェック」を抜粋した。自己評価表はできるだけ毎回終了前の10分程度を利用して記入してもらった。

使用言語は日本語とし、講義も授業体験も基本的に日本語で行った。ただし、抽象概念や複雑な内容の理解、参加者自身の考えの言語化と深い内省には母語を使用した方が良いと考え、適宜スペイン語も取り入れた。具体的には、講義用スライドの中で『まるごと』の理念を表すキーワード (相互理解、課題遂行能力、異文化理解能力) や第2言語習得理論に関する用語等にスペイン語訳を付した。さらに、グループディスカッションや自己評価表・ふりかえりシートへの記入といった自己評価を行う際もメキシコ人参加者にはスペイン語使用を促した。

4. 学習者体験を通じた理解深化の研修デザイン

本章では、講義と授業体験を繰り返しながら『まるごと』に関する理解を深める研修デザ

イン (表3の第1回～第8回) について説明する。

4.1 授業体験実施の目的

講義理解を補強する手段としては、「まるごとサイト」内の授業動画^⑥を視聴することや、ナオサラン・早川 (2020) のように講師によるデモレッスンを受けてたり実際の授業を見学したりすることも検討したが、参加者自身が学習者となり『まるごと』の1トピック分の授業を体験してもらうことが最適だろうという結論に達した。それは、学習者として授業を受けつつ、教師としての視点から講師の授業実践 (教科書の扱い方や練習の行い方等) を観察してもらえば、講義を聞いただけでは十分に理解できなかった内容や理解したつもりでいた内容を、深く正しく理解することができるのではないかと考えたためである。

なお、授業は教室で行う対面型をほぼそのままオンラインで行い、オンライン授業用の特別な措置 (例えば「みなど」で各自自習した上で、授業では会話に特化した練習を行うなど) は取らないこととした。それは、研修当時はオンライン授業をせざるを得なかった参加者たちも新型コロナウイルスの感染状況が落ち着けば以前のような対面型授業に戻るということがわかってきたためである。

4.2 講義と授業体験の構成

続いて、講義と授業体験をどのように組み合わせるかを考え、講義 (『まるごと』概要) → 授業体験 → 講義 (「かつどう」「りかい」の構成と教え方) → 授業体験の順番で行うことにした。授業体験を先行させると、『まるごと』に関する知識がないため漫然と授業を受けることになるのではないかと危惧された。一方、『まるごと』の概要を知ってもらった上で授業体験を行えば、授業中それを念頭に置きながら講師の授業の行い方を観察し理解を深めることが期待される。さらに、続く「かつどう」「りかい」に関する詳細な講義の中で講師自らが先の授業の「種明かし」(発問や活動の意図の説明) をした上で再び授業体験を行えば、より理解が深まるのではないかと考えた。

4.3 各回の内容

第1回・第2回 (講義1、2) は『まるごと』の概要を理解することを目的とし、JF 日本語教育スタンダードの理念と特徴、『まるごと』と第2言語習得理論との関係、JF スタンダードの木と「かつどう」・「りかい」との関係、「かつどう」・「りかい」それぞれの使用目的について、グループワークを交えながら講義を行った。講義内容については、『まるごと』執筆者による論文 (来嶋他 2012、2014) や「まるごとサイト」、同サイト内の「教え方のポイント」を参考にした。

第3回・第4回（授業体験1、2）は、トピック7第13課を「かつどう」「りかい」の順に行った。参加者には日本人がおり、メキシコ人も皆 B1以上の実力を持っていたが、授業は A2レベルの学習者を相手にするのと同じように行った。

第5回・第6回（講義3、4）では、「かつどう」「りかい」それぞれのトピックと課の構成、第2言語習得理論との関係、1つの課の進め方と授業実施上のポイントについて講義を行った。授業実施上のポイントは、「教え方のポイント」に報告者自身の経験を交えながら話した。なお、「かつどう」と「りかい」それぞれの講義は授業体験1、2と同一の講師が担当し、授業で自身が行った発問や活動の意図を明らかにしながら講義を進めた。

最後に、第7回・第8回（授業体験3、4）は第14課を使って再び「かつどう」「りかい」の順に授業体験を行った⁷⁾。授業冒頭の15分程度を第5回・第6回の講義内容の思い出し作業に使用したため、「かつどう」・「りかい」ともに課の一部を割愛した。これについては授業前日に報告者ら全員で打ち合わせを行い、授業体験の目的は『まるごと』に対する理解を深めることであり課の全てを扱うことが最重要視されるものではないとの認識を共有していた。

4.4 理解を深めるその他の工夫

『まるごと』に対する理解を深めるため、講義の要点を思い出したり学んだことを整理したりできるよう4つの取り組みを行った。

まず、毎回講義冒頭にその回の目標を確認し、講義終了後に自己評価表を用いて振り返りを行った。講義内容を思い出しながら自身の理解度を内省することにより、「理解できたこと」や「まだよく理解できていないこと」などが明確になると考えたためである。

次に、授業体験を始める際、毎回「学習者としての視点だけでなく教師としての視点も持って授業に臨むこと」を口頭で伝えた。報告者らはこれまでも非母語話者教師を対象とした日本語ブラッシュアップ研修を行った経験があるが、参加する教師たちは授業が始まると途端に学習者に戻り純粹に授業だけを楽しむ傾向が見られた。今回の授業体験はあくまでも『まるごと』を理解するためのものなので、教師としての視点で報告者らの授業の行い方を観察することも忘れぬよう事前に注意を促した。そして、授業体験に続いて行った「かつどう」・「りかい」それぞれに関する講義では、授業中の活動や報告者らの発問などを折に触れ思い出そう促し、授業体験と講義内容を結びつけられるようにした。

さらに、先述のように授業体験3、4では授業開始前に前回の講義内容（「かつどう」・「りかい」の構成と教え方）を思い出するための作業を15分程度行った。これは、講義で使用したパワーポイントの一部を見せキーワードを思い出そう促しながら進めた。

最後に、授業体験4を終えた後の第9回（講義5「評価の方法」）の冒頭30分程度を使って、それまでの講義内容を参加者自身でまとめてみる活動を行った。知識を一度整理してみることに

より、自身の理解度に気づくことができると考えたためである。参加者たちは母語別に2~3人ずつに分かれ、① JF スタンドアードの木と『まるごと』の関係、②『まるごと』と他の教科書との違い、③「かつどう」と「りかい」を使用する際に気を付けること、の3点について話し合いワークシートにまとめた。

母語別グループとした理由は活動中に抽象概念も扱うことが予想されたためであり、言語が話し合いの妨げとならないよう母語使用を促した。また、配付済みの研修資料を適宜参照しても良いと伝えた。グループ作業中は報告者らが1人ずつグループに入り、話し合いの様子を観察した。話し合い終了後、グループメンバー全員でワークシートを共有した（当該ワークシートを本稿では「『まるごと』まとめワークシート」と呼ぶ）。時間の都合により全体での共有は割愛したが、話し合いの中で新たに生まれた疑問点は、研修最終日の質疑応答の時間に尋ねてもらったこととした。

5. 研修の成果

本研修の2つの目的（①『まるごと』の理念・教え方について理解を深める、② M 大学日本語教師たちの『まるごと』使用への不安解消）を果たすことができたかどうか、次の4つの資料から考察を試みる。

- ・ 終了時アンケート結果
- ・ 講義用自己評価表（以下、自己評価表）
- ・ 『まるごと』まとめワークシート
- ・ 研修全体の「ふりかえりシート」（稿末資料2）

さらに、授業体験を通して講義内容の理解は深まったかどうか、その理解はどのようなものであったかについても同様に考察する。

5.1 研修の目的を果たすことができたか

図1は終了時アンケートの質問項目の一部である（実際は日本語・スペイン語併記、回答はどちらの言語でも可）。同アンケートでは8人全員が本研修は「とても有意義だった」と回答し、その理由として「教科書を読んだだけではわからない使い方が学べた。グループワークでいろいろ話し合えたのもよかった。」「教科書を形成する基盤となった知識を知ったことで自信が持てるようになった。」等が書かれていた。自己評価表を見ると、毎回の振り返りでは大半の参加者が★★（できました）か★★★（よくできました）と評価しており、講義内容を概ねよく理解していたようだった。また、『まるごと』まとめワークシートの記述内容からも講義内容をよく理解していることが窺えた。ワークシートの記述内容については次項で詳述する。

以上のことから、本研修の目的は果たすことができたと考える。

M 大学『まるごと』研修終了時アンケート

1. 今回の『まるごと』研修は有意義でしたか？

- とても有意義だった
- まあまあ有意義だった
- ふつう
- あまり有意義じゃなかった
- 全然有意義じゃなかった

2. 前の質問で「有意義」または「有意義でない」と答えた理由をお書きください。

3. 授業体験をすることで教授法の理解がより深まったと思いますか。

- はい
- いいえ

——以下は運営に関する質問のため割愛——

図1 終了時アンケートの質問項目（一部）

5.2 授業体験を通して講義内容の理解は深まったか、その理解はどのようなものか

終了時アンケートの質問3に対する回答は全員が「はい」だった。自己評価表のコメント欄に、授業体験が講義理解の助けとなったと書いた参加者も3人いた⁽⁸⁾。また、同表を使って研修最終日に改めて各 Can-do について自己評価してもらったところ、1人を除き⁽⁹⁾7人がほぼ全ての項目について★★★（よくできました）と評価し、講義直後より理解が深まっていることが明らかになった。

では、参加者たちの理解はどのようなものだったのだろうか。『まるごと』まとめワークシートの記述内容からキーワードを拾いながら考察する。スペイン語で書かれたものは日本語に翻訳してある。

5.2.1 JF スタンドの木の木と『まるごと』の関係

「教科書は JF 日本語教育スタンダードに基づいて設計されている」「[かつどう]は Can-do に相当し「りかい」は言語能力に相当する」といった記述が見られた（図2）。JF スタンドの木の木と『まるごと』の関係を正しく理解していることが窺えた。その一方、あるグループは「[かつどう]が花ならば、どうしてその根である「りかい」から教えないのか」という疑問を書いていた。「かつど

1. JFスタンダードの木と『まるごと』の関係

『かつどう』
上（花）の部分 コミュニケーション言語活動
できる
やりとり
産出
受容

『りかい』
下（根）の部分 コミュニケーション言語能力
言語構造能力
社会言語能力
語用能力

図2 『まるごと』まとめワークシートの例

う」の講義の中で、「りかい」と合わせて使用する場合は「かつどう」→「りかい」の順に使用するのが望ましいと伝え、その理由として『まるごと』は課題遂行能力の育成を目指しているため、まず「かつどう」でコミュニケーション言語活動を遂行してから、その活動を支える言語知識（文法や語彙など）を学ぶのが良い」と説明していたが、このグループのメンバーにとっては納得できなかったようである。

5.2.2 『まるごと』と他の教科書の違い

これは、他の教科書と比較することで『まるごと』の特徴を浮かび上がらせてもらう意図で設けた問いである。キーワードとして多く挙げられていたのは、カラー写真と絵、オンライン教材、Can-do チェックによる自己評価、「かつどう」と「りかい」の2分冊、音声インプットの多さなどだった。一方、「知識を体系化するための練習が少ない」「書く技能を身につけるには遅いと感じられる部分もある」というマイナス面を挙げたグループもあった。いずれにせよ、『まるごと』の特徴を的確に捉えていると考えられる。

5.2.3 「かつどう」と「りかい」を使用する際に気を付けること

まず「かつどう」については、「文法などを教えすぎない」「必ずしも情報を完全に理解する必要はなく、重要な部分の理解が必要である」「全ての学生がこのような学び方をしているわけではないため、教え込むことを我慢するのが難しい場合もあるだろう」といった注意点が挙げられていた。講義担当講師は、「かつどう」を教える際のポイントの一つとして「教えすぎないように我慢すること」を伝えたが、そのインパクトが大きかったようである。

次に「りかい」については、「学習者の気づきを促すような質問を考える」「文法の説明は簡単に」などが挙げられていた。どちらも講義担当講師が「りかい」を教える際のポイントとして挙げていたことである。

その他、両者に共通の注意点として「音声の活用」「必要に応じて文法練習を加える」という記述もあった。

研修資料を適宜参照するよう伝えたとはいえ、限られた時間の中で重要な情報を抜粋することができたということは、『まるごと』に関する理解が深まっていたからこそと言えるだろう。

6. まとめと今後の課題

オンライン研修の実施には対面型とは異なる手間や困難を伴うことが多い。今回も、14時間の時差を考慮した時間調整に始まり、講義・授業体験中はパソコン操作に手間取ったりネット環境によって音声に支障が出たりと対面型研修では起こりえない事態に度々見舞われた。しかし、結果的にはデメリットよりメリットの方が大きかった。それは、2週間ほぼ毎日顔を合わ

せたことによって親和的な雰囲気醸成され、参加者たちが発言しやすくなったことである。参加者たちは、所属校、母語、日本語運用レベル、教授歴の違いを越えて毎回活発に意見交換を行っていた。当初の予定通り1週間程度の日程だったらこのような雰囲気にはならなかったかもしれない。また、研修期間が長かったため講義をゆったり進めることができ、参加者たちが学んだことを思い返し自分なりに咀嚼してみる時間も取れたのではないかと思われる。1週間程度の短期集中型研修だったら、知識の詰め込みで終わっていた可能性もある。

一方、今後の課題もいくつか見つかった。まず、今後同様の研修を行う場合に備え、講義の内容と構成を一部修正する必要がある。例えば、『まるごと』と第2言語習得理論との関係は、『まるごと』概要の中で説明するより「かつどう」・「りかい」の構成と絡めながら取り上げた方が理解してもらいやすかった。来嶋他（2014）が言うように、『まるごと』の各課は第2言語習得研究の知見を取り入れ構成されているため、両者の関係を捉えやすかったのだろうと思われる。他の講義内容についても、受講者たちの反応を思い出しながら順番を入れ替えたり量を加減したりして、無理なく学べるよう工夫したい。

また、参加者たちへの継続的支援も重要である。前章で述べたように、参加者たちは『まるごと』についてよく理解しているようではあるが、それを実践に生かせるかどうかは別である。当初は研修終盤の模擬授業を通して各参加者の理解度を確認する予定だったが、オンライン研修に変更したことによりそれは断念した。従って、新学期開始後にタイミングを見計らって授業見学をさせてもらい、『まるごと』の使い方や練習の行い方等に問題があれば指摘し修正を促すのがよいと考える。新学期以降も当分の間はオンラインで授業を行うことが決まっているため、見学も行いやすいだろう。また、報告者らだけでなく参加者同士でも授業見学を行い、コメントやアドバイスをし合うのも有効であろう。さらに、半年後あるいは1年後をめどにフォローアップ研修を行う必要もあるだろう。それは、一定期間使用してみて初めて感じる疑問や困難点などがあるためである。現場に合わせて使い方を過度に「カスタマイズ」してしまうこともありうるため、フォローアップ研修の中でそれを軌道修正する必要もあるかもしれない。

本研修終了時、参加者たちは『まるごと』使用に対して非常に意欲的だった。この意欲を持続させてもらうためにも、また、『まるごと』の良さを十分に生かして使用してもらうためにも今後も支援を続けていきたい。

〔注〕

^①『まるごと 日本のことばと文化』は、国際交流基金が開発した JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックである。入門（A1）から中級（B1）まで9冊が発行されている。入門（A1）、初級1（A2）、初級2（A2）は、それぞれ「かつどう」と「りかい」の2分冊になっている。前者は聞く・話すを中心としたコミュニケーション力の育成を目的とし、後者は語彙や文法など言語知識の学習を目的としている。

^② フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、中国語の中から1つ選び1セメスター学ぶ。

- (3) メキシコの大学は、前期が8月～12月、後期が翌年1月～5月。
- (4) 付属 C 高校は研修当時日本語授業が実施されていなかったが、今後実施の可能性があるので参加した。
- (5) 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』は日本の高等教育機関に属する学習者を主な対象として、筑波ランゲージグループにより制作された教科書。出版は凡人社。Vol.1～Vol.3の3巻があり、各巻に対してNOTESとDRILLSの2冊がある。初版の刊行年はVol.1が1991年、Vol.2とVol.3が1992年。
- (6) 「まるごとサイト」は『まるごと』を使用する学習者と教師のためのウェブサイトである。学習者向けに「音声ファイル」や「ごいインデックス」等の学習材が、教師向けに「教え方のポイント」(教科書使用上のガイドライン)等が提供されている。授業動画は国際交流基金サンパウロ日本文化センターで『まるごと』を使って行われた授業の様子を撮影したもので、教科書の使い方や学習者の活動の様子等を知ることができる。
- (7) 授業体験3・4は、授業体験1・2とは別の日本語専門家が担当した。その理由は、『まるごと』使用上のポイントは押さえつつ、授業の行い方は講師によってバリエーションが出ることを示したいと考えたためである。
- (8) 「Can-do 8 りかい編の特徴とトピックと課を構成する要素について、説明することができる。」について、例えば「授業体験があったので、ステップをつつけるのは簡単になったと思う。」(原文ママ、下線は報告者)と書いた参加者や、「Can-do 7 かつどう編の各パートの目的と効果的な教え方を説明することができる。」について「授業の流れのおかげで、どこに何かしなければならぬのがよくわかりました。」(原文ママ、下線は報告者)と書いた参加者など。いずれも評価は★★★(よくできました)だった。
- (9) この1人は研修直後も最終日もほとんどのCan-doについて★★(できました)と評価していたが、「ふりかえりシート」の中で「Can-do チェックで聞かれると『本当にわかっているかな?』と疑問に思ってしまう。自己評価はとても難しい。」と述べていた。自己評価が厳しめなのかもしれない。

[参考文献]

- アーバーポーン ナオサラン・早川直子 (2020) 「『まるごと』を知るコース」実践報告—協学による気づきのある研修をめざして—『国際交流基金日本語教育紀要』16、51-61
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2012) 「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』8、103-117
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2014) 「『まるごと 日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み」『国際交流基金日本語教育紀要』10、115-129
- 国際交流基金「まるごとサイト」<<https://www.marugoto.org/>> (2020年11月26日)
- 国際交流基金 (2014) 『まるごと 日本のことばと文化 かつどう』(初級2 A2)、三修社
- 国際交流基金 (2014) 『まるごと 日本のことばと文化 りかい』(初級2 A2)、三修社
- 直井恵理子 (1999) 「メキシコに於ける日本語教育の現状と展望」『Ja-Net』スリーエーネットワーク <<https://www.3anet.co.jp/np/info-detail/22/>> (2020年8月23日)

メキシコの大学教師対象『まるごと 日本のことばと文化』研修

資料1 自己評価表（講義用）

日程	目次		No.	Can-do	評価	コメント
7月20日（月）	概要	『まるごと』概要①	1	『まるごと 日本のことばと文化』の理念と特徴について、説明することができる。	☆☆☆	
			2	JF日本語教育スタンダード（JFS）と『まるごと』の関係について、説明することができる。	☆☆☆	
7月21日（火）	概要	『まるごと』概要②	3	『まるごと』かつどう編・りかい編の特徴について説明することができる。	☆☆☆	
			4	『まるごと』を、第2言語習得理論と関係づけながら、説明することができる。	☆☆☆	
7月25日（土）	課題遂行	かつどう編の構成 かつどう編の教え方	5	かつどう編のトピックと課を構成する要素について、説明することができる。	☆☆☆	
			6	かつどう編の課の流れを、第2言語習得理論と関係づけながら、説明することができる。	☆☆☆	
			7	かつどう編の各パートの目的と効果的な教え方を説明することができる。	☆☆☆	
7月25日（土）	課題遂行	りかい編の構成 りかい編の教え方	8	りかい編の特徴とトピックと課を構成する要素について、説明することができる。	☆☆☆	
			9	りかい編の課の流れを、第2言語習得理論と関係づけながら、説明することができる。	☆☆☆	
			10	『まるごと』における文字学習の考え方について、説明することができる。	☆☆☆	
			11	りかい編の各パートの目的と効果的な教え方を説明することができる。	☆☆☆	
7月29日（水）	評価	評価の方法	12	『まるごと』における評価の考え方について、説明することができる。	☆☆☆	
			13	かつどう編で行う評価の方法や、テストの内容・実施方法・評価の仕方について、説明することができる。	☆☆☆	
			14	りかい編で行う評価の方法や、テストの内容・実施方法・評価の仕方について、説明することができる。	☆☆☆	
7月30日（木）	異文化理解	文化の教え方	15	『まるごと』における「文化」の考え方について、説明することができる。	☆☆☆	
			16	「生活と文化」や「ことばと文化」を教える際に気を付けることや大切なことについて、説明することができる。	☆☆☆	
	評価	ポートフォリオとは？	17	ポートフォリオを構成する要素と意義について説明することができる。	☆☆☆	

☆☆☆しました ★★☆☆できました ★★★よくできました

資料2 ふりかえりシート

ふりかえりシート

1. 今回の「まるごと研修会」で一番勉強になったことはなんですか？
¿Cuál fue el punto que aprendiste mucho a través de este Seminer de Marugoto?

2. 今回の「まるごと研修会」で一番難しかったことは何ですか？
¿Cuál fue el punto más difícil en este Seminer de Marugoto.

3. 今回の研修を通して「教えることに対する考え方」や「授業に対する考え方」が変わりましたか。変わったという方は、どう変わりましたか？
¿Su pensamiento sobre la enseñanza y las clases cambió a través de este curso? Si ha cambiado, ¿cómo ha cambiado?

4. 「まるごと」についてもっと知りたいことがありますか？
¿Tiene algo que quiere saber más sobre "Marugoto"?